

中央ユーラシア・テュルクの英雄叙事詩 「オラクとママイ」

坂井 弘紀（和光大学）

1. 「ママイ・ハンの物語」 (バシュコルト版)

出典

«Мамай хан хикәйәте», Башкорт халык ижады 5, Өфө, 2000.

イゼル（ヴォルガ）川流域でスングズ・ハン（チンギス・ハン）の息子たちが敵と戦ってから長年が経って、ママイというハンが国を治めていた。ママイの父ムサには二人の妻がいて、一人は7人の息子を、もう一人は5人の息子を産んだ。ママイは第二夫人から産まれた5番目の息子で末子であった。ママイは戦いに明け暮れ、あらゆるものを脅かし、すべてを自分に従わせた勇士であった。ママイが攻め入った場所で、人々は殺され、村は燃やされ、町は灰になった。

オラクという名の勇士はママイの忠実な同士であった¹。彼らは二人で「世界の下を上にする」ほどの勢いであった。ママイとオラクは各地を席卷したすえ、カフ²という国にたどり着いた。そして、その民を脅かし、カフのハンを殺した。だが、このカフの国でママイ自身も死ぬことになった。彼の軍隊が完全に敗れたためである。ママイの死はこれまでの行いの報いだと宣された。「多くの国で、多くの人々を血に沈め、財産を奪い、住まいを燃やしたのは、横暴なるママイ、おまえなるぞ。ついに、おまえの首がはねられる時が来たのだ。何か言い残すことはないか。あれば、今ここで言え。」と。

そこでママイは、臨終の際の言葉を次のように述べた。

イゼル（ヴォルガ川）の上流のイラマル山、
わが父ムサの国が広がる場所であった。
ヤユク（ウラル川）の上流には黒い森林、
わが父ムサの夏営地が広がる場所であった。
クズル、オイスク、ビシュタマク、
わが父ムサの冬営地が広がる場所であった。
大きな歩みの粕鹿毛の馬、
我が父ムサ・ハンが、その馬に乗り駆けたのであった。／
雌馬が育ったところ、
腰に刀を差したところ、
弓を張り、矢を射たところ、

¹ このヴァリエントでは、オラクはママイと兄弟ではなく、同士に過ぎず、オラクについての言及はこれ以上なく、その役割は過小評価され、ママイを中心としたストーリーとなっている。

² カフカース（コーカサス）のこと。中央ユーラシアでは、神秘の山と考えられることもあった。イラン（サファビー朝）のキジルバシュ軍団との戦いを背景にしている。

大軍の長となって、遠くからの敵と戦ったところ、
(勇士は) みな先祖から残された。
(勇士は) 今後ママイのあとにも残る。
こう語った後、恐れられた勇士ママイの首は刎ねられたという。³

2. オラクとママイ (カザン・タタール版)

出典

«Урак белән Мамай», *Татар халык иҗаты : дастаннар*, Казан, 1984.

昔、オラクとママイという兄弟がいた。彼らにはカロレクという母がいた。
ママイには子供がなかった。オラクには二人の子供がいた。一人は8歳で、もう一人は7歳であった。その時代、10のノガイはオラクの支配下にあった。
ある日、オラクが死んだ。彼が死んだことを聞いて、カルマクのハンが使いをよこした。
「ママイはもう老いた。オラクの子供は若い。民を私に向かせ、税を払え。もしもこれに従わねば、ママイいるアラタウに戦いに来い」と言った。ママイは10のノガイを召集した。「どうすべきか。税を払うべきか、それとも戦うべきか」。ノガイの民たちは言った。「われらは戦いません。戦えば、みな滅んでしましましょう。」そして、彼らは税を払うことに同意し、戦いには行かなかった。だが、ママイは使いの鼻と耳を切り取り、ハンのもとへ追い返した。「ここから去って、ハンに伝えろ。わしは貢ぎを贈らん。アラタウへ戦に来いと！」。

そして彼は自分の馬に乗って、戦いに向かった。戦場には、500人ものカルマク兵が来ていた。彼らはママイを取り囲んだ。ママイは彼らと戦った。500人のカルマク兵のうち250人を倒した。残りは逃げ去った。逃げて、カルマクのハンのもとに帰った。

彼らが逃げると、ママイは下馬した。そして鞍を置いた。弓をつるした。そして横になって、眠った。長いこと、眠っていた。そのため、カルマク人たちが近くにいることに気がつかなかった。カルマク人たちはさらに500人の兵でやってきた。まず、ママイの馬を盗んだ。そして脇腹の弓を盗んだが、ママイは気づかなかった。あるときやっと、カルマクの声に目覚めた。目覚めてみると、カルマクが山を取り囲んでいた。戦おうとしてみると、武器がなかった。石で戦おうとした。武器もなく多勢と戦えるであろうか。彼らはママイを捕まえて、首に縄を結びつけた。ながえ(かじ棒)に結びつけられてしまった。そしてある村につれていかれた。村の入り口は石で閉ざされていた。

そのころ、ママイの母カロレクは夢を見た。夢ではママイの両目が、無くなっていた。オラクの息子の一人を呼んで、こう言った。

「今日は夢を見た。おまえの父さんの両目が無くなっていた夢だよ。父さんはカルマクの捕虜になっているに違いない。どうすればいいのか？われらのノガイ人たちはいないし、おまえもまだ若すぎる」と。すると息子は、「私が行きます！」と言った。老婆は、「行き

³ “Mamai khan khikäiäte”, *Bashqort khalyq ijady* 5, öfö, 2000, 181-182 bittär. (テキストはバシュコルト語)

なさい。おまえに駿馬がある。それを飼うことが必要だ。サンドゥク（長持ち）に鎧があるから、着なさい。それから鞍があるからそれを馬につけなさい」と言った。

馬に鞍をつけ、準備をして、敵に向かっていった。アラタウに行くと、そこに一人のカルマク人が歩いていた。それは鼻を斬りつけられたカルマクであった。このカルマクの勇士に言った。「私の父はどこだ。言え。言わねば、おまえを殺すぞ。探し出して、つれて来い」と。カルマクは「見つけてきておまえに教えれば、私を殺さないか」と答えた。

勇士はそれを聞き入れ、二人はある井戸の傍に来た。井戸の入り口の石を投げた。長い縄をそこに投げ入れて、ママイを外に救い出した。外に出すと、件のカルマク人に、「羊をわれらの家に連れ去れ」と言った。

彼はカルマクの町へ行った。カルマクの町についた。誰かが来るのをカルマク・ハンが見てみると、それは見知ったオラクの息子であった。ハンはそこから逃げ出した。

オラクの息子は、町に入った。カルマク・ハンの娘は、彼の前に来て、食事を与えた。食事を終えて、勇士はハンのあとを追いかけた。彼が来るのを見て、カルマク・ハンが馬の向きを変えた。

「一騎打ちの順番を決めよう」と言った。勇士はハンに攻撃権を与えた。カルマク・ハンが矢を射た。矢は勇士の、9層の鎧の7層に達した。勇士は言った。「次は俺の番だ」と。

勇士の番になった。勇士はカルマク・ハンに矢を射た。矢はカルマクを射ぬき、黒い石に当たった。カルマクは倒れた。勇士はハンの馬に乗って、ハンの娘のもとに行った。娘は父が死んだことを知った。娘は「あなたの妻になります」と言った。

食事を取っていると、再び500人のカルマクがやってきた。娘は出ていけず、泣いた。「彼らはあなたを殺すわ」と言って。彼は、その言葉にも関わらず、馬に乗ってカルマクたちと戦い始めた。勇士は、この500人のカルマク人を倒した。そして、カルマクの国中を自分の手中に収めた。多くの家畜と金銀を手に入れた。多くの民を従えて、帰宅した。帰郷すると、10のノガイの人々もやってきて、迎え入れた。

祝宴が行われた。そしてこの勇士を町にハンとして頂いた。彼は公正なハンとなり、人々の生活はたいへんすばらしいものとなった。⁴

3. 「オラク・ママイ」（クリミア・タタール⁵）版

出典

“Orak Mamai”, Radlov, V.V. *Proben der Volksliteratur der nördlichen türkischen Stämme* 7, SPb., 1896.

オラクとママイのミルザがある場所にいた。彼とともに兄のアリ・ウスマイル⁶がいた。また弟カルもいた。ある日、ウスマイルはカルに言った。「弟よ、おまえにも私にもなにも

⁴ “Urak belän mamai”, *Tatar khalyq ijaty: dastannar*, Kazan, 1984, 99-101. (テキストはカザン・タタール語)

⁵ 正確にはクリミア・タタールと同化したクリミア・ノガイ。

⁶ イスマイルの名でも知られる。

なく、ミルザ⁷の地位はオラクとママイにある。オラクに、大きな丘があるので、それを求めよ」と。

そしてある日、カルはオラクに言った。「兄さん、この大きな丘を私にください！」と。オラクとママイは言った。「おまえは私から馬を望み、家畜を望み、金を望む。おまえはその丘を返すのか？」と。カルは言った。「私が死んだあとも、この丘を私の丘だと人は言うでしょう」と。「出ていけ。おまえは賢いはずだ」とオラクは言った。

彼はカルのあとに出ていった。アリ・ウスマイルのもとに行った。アリ・ウスマイルは言った。「おまえは何てことをしたんだ」と。カルは言った「オラクとママイのもとに行きまして、丘をくれるように頼みましたが、くれませんでした」と。すると、アリ・ウスマイルは「私はおまえに丘が与えられるなどと言った覚えはない」ととぼけた。そして「やつを殺さなければ、もはやわれらにミルザの地位はないのだぞ」とも。するとカルは「どうやって殺しましょう？われらはやつを殺すことができますまい」と言った。

アリ・ウスマイルは「明日、二人で狩に行け。そこにはやつの刀がある。おまえはその刀を見たいと言え。やつはおまえに刀を渡すだろう。それをやつに返すときに殺してしまうのだ。

翌日、オラクとともにカルは二人で、狩に行った。道中、カルはオラクに刀が見たいと言った。彼は刀を渡し、刀を見て満足し、それを返し、オラクが刀をつかもうとしたときに、カルはその刀で兄を斬ったのであった。そしてオラクはけがを負い、家に帰りつき、寝床に臥して、詩を謡った。

そしてオラクは死に、カルはアリ・ウスマイルのもとへ行った。「私はオラクを殺しました」と伝えた。するとウスマイルは「おまえは私の勇士を殺したのか！。私の獅子を殺したのか！私は、おまえをからかって、そういったただけだったのに」と言った。

彼に恐れをなしたカルは草原へ逃亡し、そこで死んだ。⁸

4. 「ミルザ・ママイ」(ノガイ版)

出典

Ананьев Г., «Караногайские нарочные предания», *Сборник материалов для описания местности и премен Кавказа*, 1900.

チンギス・ハンの子孫が断絶してから、エディル（ヴォルガ）川流域の統治は、ムサ・ビーの子であるママイに移った。ムサ・ビーには二人の妻と 12 人の息子がいた。長男はサク・ママイ、次男はサギム、三男はアリ、四男はコスム、五男はドスム、六男はイスマイル、七男はユスフといい、彼らはムサ・ビーの第一夫人から生まれた。第二夫人からは、アルシャギル、シダク、ジャンマンベト、ヤブガシュト、ママイが生まれた。ムサ・ビー

⁷ ミルザは、ノガイ・オルダの統治者ビーに次ぐ、官位。

⁸ “Orak Mamai”, Radlov, V.V. *Proben der Volksliteratur der nördlichen türkischen Stämme* 7, SPb., 1896, 195-196. (テキストはクリミア・タタール語であるが、ノガイ語の要素がたいへん強い。)

の第一夫人の最初の息子二人はアルマという場所で生まれ、二番目と三番目はエディル川から分岐する（一つは海へ、もう一つはタシュブルンへ）ジデクで、五番目と六番目はタシュブルンで、七番目の子ユスフはエディル川とテプキ川が接する上流で生まれた。第二夫人の生んだ上から四人はエディル川が灌漑するシベリアで、末っ子のママイはアラブハトで、朝早く夜が明けるころに生まれ、たいへん聡明で善良な子に育った。

アルシャギルにはオラクという名の子供がいた。アルシャギルはオラクが生まれると、近くのアウル老婆に乳母として預けた。かつてママイは、このアウルの近くに自分の軍隊とともに来て、草原で遊び回る多くの子供たちを見た。ママイの軍隊を見ると子供たちは驚いて、逃げ去ったが、オラクだけは逃げ出さず、落ち着き払っていた。ママイはこれを見て、その子に近づき、その手を取り、おまえは誰の息子かと尋ねた。少年はアルシャギルの息子であると答えた。ママイはその子が自分の甥であると知り、たいへん喜んだ。

オラクを連れて、兄のところに行き、オラクを自分の養子に取るよう頼んだ。こうして、オラクはママイのもとで育てられることになった。ママイはその子に魅惑され、自分の戦友たちに「友よ、この子に無礼のないよう頼む。何か欲しいと言ったら、それをあげてくれ、苦難の時は役に立つだろう」と命じた。仲間たちはママイの考えを受け入れ、このミルザの意志に従うことにした。

時が過ぎ、ママイの言葉が現実となった。オラクは勇敢な勇士となり、彼は「デリ・オラク（恐ろしいオラク）」と呼ばれた。彼の噂はママイのもとにも流れ、ママイの臣民や周辺の人々はママイを幸運だと思った。オラクのような勇敢な護り手を手にしたからである。

さてオラクとママイは軍隊をすべて連れて見知らぬ場所へと行った。兵士の間から、ママイとオラクではどちらの方が強いだろうかという疑問が出た。道中あるアウルに立ち寄り、井戸の脇に桶を持ったノガイの娘を見つけた。戦士たちは、どちらの力が優れているかについて、このノガイ娘の意見を聞いてみることにした。彼らはこの娘に近づいて尋ねた。「おい妹よ、教えておくれよ。ママイとオラクとではどちらが勇敢で榮譽にふさわしいと考える？」。ノガイ娘は、「オラク自身は勇敢な勇士で評判ですが、それはママイのおかげであり、ママイがオラクをいたるところで褒め称え、彼を護ってきたからなのです。ママイのほうがオラクよりもずっと優れているでしょう」と答えた。

ママイはヴォルガ川の河岸を征服し、民を移住させたが、これに満足せず、さらにクリム・ハン国も征服しようと考えた。

兵士たちを集めて、オラクとともにママイはクリムに向かった。ハンの本営に近づくと、兵士を井戸のところに配置した。そしてママイはクリムのハン、ペリヴァン・スルタンに使いをおくり、会見したい旨伝えた。クリミア・ハンが来るまで、オラクはママイに、自分はママイが望むほど準備が十分でないと、何度か訴えた。やがてペリヴァン・スルタンが数人の者をつれてママイの天幕にやってきた。彼を見ると、オラクはクリミアのハンを

殺そうと考え、ママイに言った。

さあママイよ、今日こそ示そうではないか、
われらの方がクリムのハンよりも勇敢であることを。
あなたはクリムを征服して、自らハンにならんとしている。
自分の刀を血で染めよう、ここで骨とともに横になろう。

ママイは答えた。「若き戦士オラクよ、わが友よ。裏切りは恥ずかしいことだ。客人はわれらのことを信用している。スルタンを殺すことはできるだろうが、これは、適当ではない」。

しかし、オラクはママイに耳を傾けなかった。オラクはペリヴァン・スルタンに襲い掛かった。彼をオグズ・タウ山まで追いかけ、そして殺した。クリミア・ハン国には自分のミルザの一人を統治者に置き、捕虜と戦利品をたくさん手にして、ママイは自分の故郷に戻った。

ママイは故郷に戻ると、民衆の前でオラクを勇敢で永遠の戦友であると称えた。自らの国を平和に治めたママイは、他の弟分の勇士たちが自分に忠誠心を示しているが、実際は彼に悪意と殺意をもっていることに気づいていた。このことを知り、ママイは悲嘆にくれ、悲しんで歌った。

「私の死後には、いとしいエディルの岸よ、おまえは誰かの手に渡る。だが忘れるな、いつかこのママイがお前とともにあったことを。おまえは忘れられない、私の大地。オラガン、ボザウルク、オルスタン、カラマク。世話もなく、水も注がれず、私の忠実な赤毛馬よ。死ぬまで悲しみ、私の死後は、お前を世話するものもない。私の足の長い速馬よ、おまえは草原を彷徨うだろう、主であるこのママイを探して。だが、ああ、ママイは目覚めぬ眠りにつくのだ。」

ママイは長く嘆き、どうしても安らぐことができなかった。やがてママイはひどく病んだ。第一夫人から生まれた 7 人のミルザたちが見舞いにやってきた。彼らが帰ると、ママイはオラクに言った。「外に出て、やつらを追いかける。あの兄弟たちが楽しそうにしているか、あるいは悲しそうにしているかを確かめよ。もし楽しそうにしていたら、それは私が不治の病だと思っているということだろう。イスマイルはこのことについてよく理解している」。オラクは言うとおりにして、戻ってきて言った。「ああ、ハンよ。あなたの兄弟たちは道中、互いに抱き合って、キスし合い、楽しそうに歌を歌っておりました」。

ママイは泣き崩れ、言った。「かけがいのないオラクよ。おまえとはもうお別れだ。だからおまえに遺言を残しておく。

この命が尽きる時がきた、私の最後の頼みを聞いてくれ。
私の死後、兄弟たちがお前をかわいがるであろう。
だが彼らの愛を信じるな。彼らから離れるのだ。
とくに邪悪なイスマイルからは。
これは私が腹を立てて言っているのではない。

ちがう。おまえの幸福と栄光を望んでいるからだ。
時は近づいた。さらばだ。おまえに（エディルの）すべての岸を任せる。
母なる豊かなエディル川よ、わが人民を育てる川よ。」

オラクは、泣きながら去った。ママイは寝床に横になり、言った。
神よ、誰があなたに逆らうことができませんよう。
あなたは私たちに死を送ったのです。
彼はオラクに助言を行ってから言葉を失い、3時間後に息を引き取った。

オラクは悲しみのあまり天幕に閉じこもり、ママイが死んだことを口にする人の首を切ることを宣言した。ママイの葬儀にはたくさんの人々が集まったが、誰も死者の埋葬の時間をオラクに伝える決心ができなかった。

ついにアサン・アブズ⁹という古老がオラクの天幕に近づき、ママイの死は神の意志によるものであるので、オラクの行いは神を悲しませていると、また遺体は大地に埋葬しなくてはならないと彼に伝えた。オラクは思い直し、天幕から出て、6頭の青毛馬を連れてきて、そのたてがみを切り、そこに黒い馬衣を着せて、高貴なる武器を吊るし、そこに馬車をつけるように命じた。オラクの意思は織物で飾られた六頭だての馬車に正しく実行され、ママイの遺体は丘に引き出され、慟哭とともに埋葬された。当時の慣習に従うと、ハンやミルザの死に際して歌い手が呼ばれ、死者を悼む哀歌を歌い、死者の遺した馬や外套が贈られた。

ママイの死後、たくさんの詩人が集まった。その一人は次のように歌った。

善行をなしたママイ、あなたの遺骸に安らぎを
あなたはすべての人に寛容であった。
多くの人に高価な毛皮を与えた。
高価な駿馬を与えた。
罪人を裁くときにも公平で
正しいものには正しく報いた。
多くの恋人たちの運命を決め、
彼女らと結婚して、その幸運を喜んだ。
あなたはクリムのペリヴァン・スルタンを殺害した
真珠のような美しい妃を奪った
そして彼女を妻として
彼女にとって模範的な夫となった。
ああ、神よ、あなたがいまだお創りになられていないような家庭人なのだ。

⁹ アブズとは、守護者・庇護者を意味するが、聖者やコーランを暗記している人も指す。ここでは、シャーマンの要素を持った賢者にとらえられるだろう。アサンは著名な語り手のアサン・カイグと同定されるかもしれない。

また別のものは次のように歌った。
ああママイよ、我らの勇敢な首領よ、
あなたの前ではすべてが等しい
老いも若きも富者も貧者も。
あなたは町を囲み、
いつも名声と戦利品とともに凱旋した
ママイよ、あなたにとって達成できぬものは
戦場にはなにもない。
あなたはモスクワでもその名誉を示し
いかなる行軍でも
そこから千もの黄金を持ち帰った
あなたの功績をすべて数えたら
それを言葉で表すことはできない。
もしも世界に二人の一流の勇士がいたとしたら
その二人の中でも一番はあなたである。

こう歌ったある若い語り手はハンの毛皮を頂戴した。多くの語り手がさらに賞賛の歌を歌ったが、オラクを満足させるものはなかった。

ママイの死後、オラクがオルダの覇者となった。すぐにオラクは自分の民を掌握した。オラクのもとには親戚のカルウがいたが、あまり利口でないことで知られていた。

イスマイルはオラクを追放して殺害しようとし、カルウに命じた。「ママイの死によって、政権は我々部族の長兄であるおまえの手にあるべきだ。もう耐え忍ぶ時期ではない。毎朝オラクはモスクで礼拝を行う。おまえは明日の朝モスクに出向き、礼拝をしているときに背後に隠れ、刀でやつを殺すのだ」と。イスマイルの言葉はカルウにとって理解しやすく道理あるものに思えた。

次の日、カルウはモスクに赴き、オラクを殺害すると、イスマイルのもとに戻り、彼にハンの死を伝えた。イスマイルはすぐにその場から飛び跳ね、手に弓を持ち声の限り大きく叫んだ。「なんてことをしたのだ、このろくでなしが！我らが長を殺しただと？おまえの命を奪ってやる」。カルウは天幕から逃げ出し、クリミア・ハンの庇護に入り、かわってイスマイルがオルダで即位した。

オラクの死後、三人の息子が遺された。長男のカラサイは 14 歳、次男のカズは 10 歳、末のイバスは乳飲み子であった。

イスマイルはオラクの死後、未亡人にこう言った。「カルウはクリミアのハンのもとにあります。もしあなたの遺児たちがここに残るのでしたら、やつは全力を尽くしてあの子たちを殺そうとするでしょう。子供たちをチェルケスに送りましょう。まだ幼いイバスはあ

なたと私のもとで暮らすのがよろしいでしょう」。オラクの未亡人はこのことを長老のアサン・アブズに相談した。長老は、イスマイルは遅かれ早かれオラクのように彼らを殺してしまうだろうからと、未亡人に子供を送ることを助言した。二人の息子は、母である未亡人が悲しむなか、チェルケスに送られた。

イバスが 20 歳になると、イスマイルは彼を呼び、次のように言った。「おまえの兄さんたちがチェルケスに行ってからもうずいぶん経つ。兄さんのもとに行き、喜ばせ、嬉しがらせてあげなさい」と。イバスはそのチャンスに喜び、馬に乗り、お連れの者とともに兄のもとに向かった。イバスが出かけたことにイスマイルは喜び、その背後から刺客を送り、彼を殺害させようとした。イバスは人気が高く、民衆はこの若者をたいへん愛していたため、イスマイルはそれが気に食わなかったからである。兄たちが住む場所に近づくと、イバスはお付きの者を先に送り、兄たちに会う願いが叶う喜びを伝えさせた。

それは秋の夕方であった。イバスは兄たちを待ちながらたき火を起こした。夜になった。突然イバスは誰かの呼ぶ声を聞いた。そこに近づくと、そこには武装した騎士がいた。彼はイバスに言った。「親愛なる兄弟、イバスよ。私はおまえの兄カラサイだ。武器を捨てよ。兄弟の抱擁をしようではないか。」イバスは武器を置き、あいさつをしようと騎士に近づいた。しかし騎士は刀でイバスの胸を切り裂き、駆け去っていった。それはイスマイルの送った暗殺者だったのである。やがて本物のカラサイとカズがそこに来ると、血まみれになった弟が倒れていた。そこで何が起きたかを知った彼らは暗殺者を追いかけ、その首を落とした。彼らは戻ると、弟の亡骸を自分のアウルに運び、大地に埋葬した。

数ヶ月後、ある事情でカルウがクリミアからチェルケスにやってきた。カルウの来訪を知って、カラサイとカズは彼を取り囲み、「おまえは我らの父を殺したが、悪党よ、いまその息子たちの手にかかって死のうというのか」と言った。カルウは彼らの前で跪き、自分はオラク殺しには責任がないことを説明し、もし命を助けてくれるのなら、クリミアのハンやミルザとの関係を取り持つことを約束した。兄弟は父殺しの犯人を哀れに思い、彼を無事にクリミアに送り返した。

クリミアには臣従を示す証として武器を贈り、ハンに従うのが妥当であるか尋ねる慣習があった。クリミアのハンはかわりに剣を受け取った。自分のミルザを招待して、彼らに剣の価値について尋ねた。そこでカルウは言った。「その美しい剣は、オラクの息子である無敵のカラサイとカジだけが扱えるものです」と。ハンは彼らに興味を持ち、カルウを使いとして送り、次のように命じた。

「クリミアのハンは、かつてのクリミアとタタールとのすべての敵対関係を止めて、二人の勇士に庇護と血を与えることを望んでいる」と。カジは疑いをもってカルウに対し、ハンに次の説話を伝えるよう頼んだ。

「草原に熊と獅子が住んでいた。あるとき、獅子が木の下で眠っていた。熊はそれを見て、からかってやろうと思った。そっと獅子に近づき、前足で力いっぱい頭を殴り、足の中に隠れた。獅子は長いこと失神していたが、どうにか熊を罠にかけて殺そうと考えた。

狐が悲しんだ様子の獅子と出会った。狐はなぜ悲しんでいるか尋ねた。獅子はこの経緯を話した。狐は熊の脳みそをもらう条件で、熊を獅子の元に連れてくると約束した。獅子は同意した。狐は熊をだますことに成功し、獅子の元に連れてきた。獅子は突進し、熊をずたずたに噛み切り、肉片をあちこちにばらまいた。狐は約束を反故にしたことを非難した。獅子は『どうしておまえに脳みそを与えることができる？熊にはもともと脳みそなどなかったのに。もし脳みそがあれば、のこのこおまえのところにやってくるはずなからう』と尊大に答えた。ハン是我らにたいし、獅子と熊の関係のようにしようと思いのではないか？」

カルウはこの話をハンに正確に伝えた。ハンは二人のミルザとともに再びカルウを派遣し、二人の勇士に決して侮辱的な態度は取らないと誓ったことを伝えさせた。

二人の兄弟はクリミアに現れ、ハンの御前に出でた。ハンは彼らを愛想よく迎え入れ、どれだけ自分に忠実か試そうと考えた。そのときのクリミアのハンはアディル・スルタンであった。アディル・スルタンは、これまでオラクによって殺害されたハンやミルザの名前が刃に書かれている剣が、カラサイの元にあることを知って、その刃を見せるように頼んだ。深々と頭を下げ、ハンの手には剣を差し出した。ハンはそれを見て、その名を読み、カラサイに返した。また別のときに、ハンはカジを手招きし、カジがクバンで手に入れた帽子を見せるように頼んだ。カジは帽子を取らずにハンに近づき、頭を大地につけて謁見した。ハンは帽子を見て、感謝しながらカジに返した。そのときからハンのミルザたちはこの兄弟を信用して、接するようになり、ハンであるアディル・スルタンも彼らをいつも守ることや自分の祖父の復讐はしないということを誓った。数年後、アディルが軍隊を集め、カラサイとともにペルシアに行軍することを決めた。血にまみれた戦いのあと、アディルはペルシアの捕虜となった。カラサイは軍勢を連れて後退した。¹⁰

【解説】

ここで紹介した作品は、いずれもオラク¹¹とママイなる 16 世紀に実在した人物を主人公とした物語である。彼らはキプチャク草原の遊牧政権ノガイ・オルダの有力者であった。中央ユーラシアのテュルク系叙事詩には、歴史的なできごとを題材に、実在した人物を主人公とした作品が少なくない。オラクとママイを描いた作品もまた歴史的な状況を背景としている。

今回取り上げたテキストは、バシュコルト、カザン・タタール、クリミア・タタール（正確にはクリミア・ノガイ）、ノガイに伝えられたヴァリエントによるものである。これらの民族はノガイ・オルダとたいへん深い歴史的関係がある。バシュコルトやノガイ、クリミア・タタールの一部はノガイ・オルダ統治下にあった人々の子孫であり、カザン・タター

¹⁰ Anan'ev G., "Karanogaiskie narodnye predaniya", *Sbornik materialov dlya opisaniya mestnosti i plemen Kavkaza*, 1900, 1-38. (テキストはロシア語。原文はノガイ語であったと思われるが、その存在は不明。)

¹¹ 原文では、オラク Orak, Oraq ではなく、ウラク Urak, Uraq であるテキストもあるが、便宜上本稿ではオラクに統一した。

ルもノガイ・オルダとは密接な歴史的経緯がある。ここでは取り上げた作品に基づいて、ママイとオラクがどのような人物として伝えられてきたかを簡単に見てみたい。

まずママイについて見てみよう。ママイは、ノガイのテキストによると、「チンギス・ハンの子孫が断絶し」たため、「ヴォルガ川流域の統治は、ムサ・ビーの子であるママイに移った」とされる。16世紀、キプチャク草原はチンギス・ハンの血統を引かぬ政権ノガイ・オルダに治められていた。16世紀前半に活躍したママイはノガイ・オルダの統治者の中でもたいへん著名な人物で、多くの口碑や種々の史料にその名が見られる。当時のノガイはロシアともクリミアとも密接な関係をもっていた。クリミア・ハンを殺害しようとするオラクをママイが止め、クリミア・ハンと会見しようとする場面は、クリミアとの関係を重視するママイの姿を描いているのかもしれない。

タタールのテキストでは、ママイは年老いたが、貢物を要求するカルマクにたいして、貢納を受け入れようとするノガイの民を前に断固としてこれを拒否し、使いの鼻と耳を切り取り、ハンのもとへ追い返すほどの厳しい姿勢を示した。バシュコルトのテキストにも「ママイは戦いに明け暮れ、あらゆるものを脅かし、すべてを自分に従わせた勇士であった。ママイが攻め入った場所で、人々は殺され、村は燃やされ、町は灰になった」とあるように、各地を攻めて、暴れまわる意気盛んな勇士であった。しかし、タタールのテキストでは、ママイが敵にさらわれてしまう。バシュコルト版では、捕らえられた末、首をはねられ殺されてしまっている。またノガイ版では、ママイは病死している。タタール版では救出されるものの、その他は大往生といえない悲惨な最期である。

ママイは「あなたはすべての人に寛容であった。多くの人に高価な毛皮を与えた。高価な駿馬を与えた。罪人を裁くときにも公平で、正しいものには正しく報いた（ノガイ版）」と優れた統治者であったと伝えられ、人々がママイの死を悼む様子が描かれるのも印象的である。

次に、オラクであるが、彼は、ママイとともに、「彼らは二人で世界の下を上にするほどの勢いであった（バシュコルト）」というほどの勢力を誇っていた。また、タタール版では「10のノガイ¹²はオラクの支配下にあった」とあるように、ママイと並んで、ノガイの有力な人物であったことが伝えられる。幼少のオラクは、ママイの軍隊を見ても、一人だけ逃げ出さず、落ち着き払っていたとノガイでは伝えられる。彼は、「デリ・オラク（恐ろしいオラク）」と呼ばれ、オラクのような勇敢な護り手を手にしたママイは幸運であると、ママイよりも勇敢な戦士であったことが歌われている。もっとも、「ママイがオラクをいたるところで褒め称え、彼を護ってきたから、ママイのほうがオラクよりもずっと優れているでしょう」という言葉にあるように、ママイの庇護にあつて、オラクが頭角を現すことが可能であったという性格づけがなされている。これは、オラクがママイの養子であることが、背景にあるようである。バシュコルトのテキストでは、単に「同士yuldash」とされるが、ノガイ版では自分の甥である優秀なオラクを養子にする様子が描かれている。タタール版では兄弟として描かれているが、ノガイのテキスト冒頭にあるムサ・ハンの子孫の名

¹² いくつかの部族集団からなるノガイの国。

は他の史料とも重なり、信憑性が高い情報であり、またロシアの書簡史料での言及などから考えても、オラクがママイの甥であることが確かなようである。しかし、「オラクは、(ムサの息子の) イスマイルなどとそれほど年が離れておらず、ムサの息子たちの一人のようであり」との指摘があるように、ムサの息子であるママイと兄弟のような関係にあったのであろう。クリミア・ノガイのテキストでは、一部「オラク・ママイ」とあたかも同一の人物のように描かれる箇所もあるが、これはオラクとママイがまるで同一人物であるかのような二人の近しさや「オラク・ママイ」という言葉から来る一人の人物であるとの誤解から生じたものであろう。

オラクの最期は、オラクよりも劇的に印象的に描かれる。クリミアのテキストでもノガイのテキストでも、イスマイルに唆されたカル(あるいはカルウ)が卑怯な手を用いて、刀でオラクを斬り殺す。狡猾なイスマイルによって操られたカルがイスマイルに裏切られる点でも共通している。ノガイのテキストでは、カルがオラクから奪った刀をクリミア・ハンに贈ったことが歌われるが、それはオラクの息子カラサイとカジだけが扱えるものとされる。オラクの名刀は中央ユーラシアの口頭伝承でしばしば歌われるよく知られた得物なのである。この他にも、カザフの詩人ムラト・モンケウルの『カラザイ・カジ』でも、オラクはイスマイルらの罠にかかって自らの金剛の刀で命を落としてしまう様子が描かれる。このようなオラクの伯父による暗殺とそれに名刀が用いられたというのは、多くのヴァリエントに共通するモチーフとなっている。

ちなみに、オラクは、現代カザフ文学の代表的作家であるオルジャス・スレイメノフの『オラクの歌』という作品にも取り上げられ、カザフ文学史においてもその存在感を示している¹³。

オラクとママイの物語には後日談があり、それは『カラサイとカズ』や『アディル・スルタン』などの叙事詩作品で描かれる¹⁴。ノガイのテキストには、オラクの息子カラサイとカズがクリミア・ハンのもとにいき、彼とともにペルシアに行軍し、アディルは捕虜となり、カラサイが敗退することが歌われる。ノガイのこのテキストに続いて、カラサイとカズが戦う様子が『クリミアのアディル・スルタン』として描かれる。タタール版でも、「オラクには二人の子供がいた。一人は8歳で、もう一人は7歳であった」と描かれ、具体的な名前はないものの、これらはカラサイとカズという二人の勇士にほかならない。オラクとママイの話は、カラサイとカズの話につながるものが一般的で、ノガイ大系の中心的作品となっているのである。

ところで、ここで紹介した作品には、シャマニズム的世界観が随所に見られ、この地域の世界観が反映されている。たとえば、カザン・タタールのテキストでは、カルマク・ハンとの決戦で「矢は勇士の9層の鎧の7層に達した」と叙述される。この「9層」あるいは「7層」は、天や大地が7層や9層など、いくつかの層から構成されるとするテングリ(天

¹³ 拙稿「カザフ口承文芸における「ノガイ大系」の影響 ～「オラクの詩」を題材として～」『口承文芸研究』24号、日本口承文芸学会、2001年。

¹⁴ 拙稿「ノガイの英雄叙事詩「アディル・スルタン」」『研究プロジェクト報告 ユーラシア諸民族の叙事詩研究(2)』千葉大学大学院、2004年を参照のこと。

の神) 崇拜の考えによる発想と類似している。また、同じくカザン・タタール版では、ママイの母カロレクが、ママイの両目が無くなっている夢を見て、カルマクの捕虜になっているのではと解釈する。オラクの息子たちが登場する『アディル・スルタン』でも主人公アディルが殺されたことを、彼の母が夢で知り、それを占い師(シャマン)に解釈してもらう場面がある¹⁵。夢がなんらかの知らせをするという考えは中央ユーラシアに広がる考え方であるが、叙事詩にもそれがよく反映されており、登場人物、とくに主人公の生死にかかわる情報を夢が伝えるという場面がしばしば見られる。中央ユーラシアの叙事詩には、歴史的な情報だけでなく、彼らの世界観や精神文化も反映されているのである。

¹⁵ 同上、8-11 頁。